第12週（3月18日～3月24日）トピックス：＜2023年度の感染症発生動向変化＞

～2023年度（令和5年度）の主な感染症発生動向の特徴について～

2023年5月8日、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染症法上の位置づけが全数把握から5類定点把握に変更され、制限がなくなり、人の往来やマスク着用等の意識が希薄になるなど、コロナ前の生活に戻る中、2023年度の感染症は過去とは異なる流行状況が見られました。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19） 感染力の高い変異株が出現すると流行が急拡大し、その後しばらくして患者数の減少を繰り返し、2022年の8月の第7波で最も感染者数が多くなりました。全国の第8波のピーク時点での計算上の定点当たり報告数が約30であったことから、定点把握に変更後の発生状況と合わせて比較すると、今年度は夏季及び冬季にピークがあったものの、第7波、8波に比べ徐々に減少傾向にあり（図1）、過去に流行した新型インフルエンザ等と同様に通常の感染症に移行しつつあります。

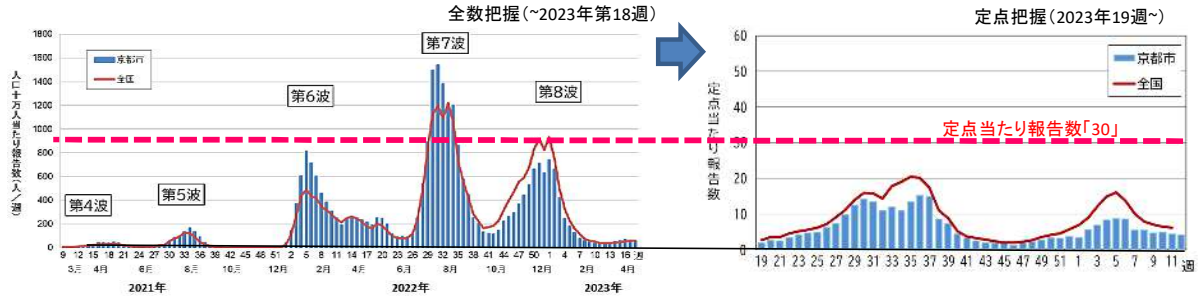
インフルエンザ 新型コロナウイルス感染症の流行以前は例年1月頃に流行のピークを迎えていましたが、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う行動制限や予防策に徹底等により、2020年から2022年はほとんど報告のない状態が続きました。2022／2023シーズンは行動制限等が徐々に緩和され、再び報告数が増加し、本市では警報レベルの目安である「30」を超えました。今シーズンは本市及び全国共に警報レベルを超えており（図2）、新型コロナウイルス感染症以前の流行状況に戻っています。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎（以下「A群溶連菌」という。） 2023年度、定点当たり報告数は、本市及び全国共に過去5年平均を上回って推移しました。以前は冬期に患者が多く報告されていましたが、2023年は春から梅雨にかけての流行も見られました。また、本感染症と同一のA群溶連菌が原因の一つとされる劇症型溶血性レンサ球菌感染症もA群溶連菌の報告数と相関がみられました（図3）。A群溶連菌は飛沫や接触によって感染するため、効果的な場面でのマスクの着用や手洗いなど、基本的な予防を徹底しましょう。

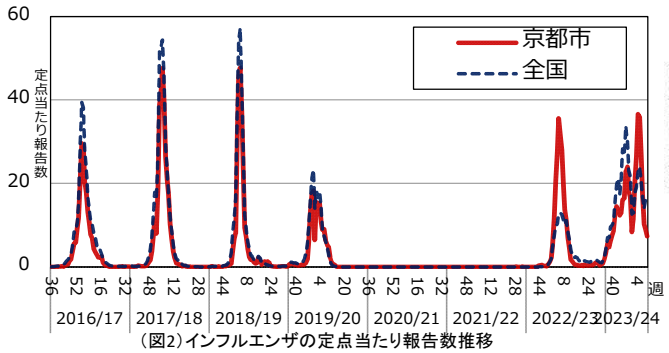
麻しん 2007年及び2008年に、予防接種法上、麻しんワクチンの接種を1回しか受けていない、10～20代を中心に大きな流行がみられました。このため、2008年1月1日から定点把握から全数把握へ移行し、同年から5年間、中学1年相当、高校3年相当の年代に2回目の麻しんワクチン接種を受ける機会を設けたことなどにより、2009年以降患者数は激減しました。その後は海外で感染した患者、またその患者を契機とした国内での感染によるもので、ワクチン接種の効果等により、大きな流行とはなっていませんが、本年3月にも海外からの輸入例を端緒とした患者が報告されています（表）。麻しんは非常に感染力の強い感染症であることから、今後国内での感染拡大に注意が必要です。

梅毒 近年増加傾向にあり、2023年の全国の報告数は過去最多となる14,906例となりました。直近5年間（2019年～2023年）では48,613例、それ以前の5年間（2014年～2018年）では21,759例であり、2倍以上の増加となっています。また、妊娠中の女性が感染することにより、胎児も感染し、流産や死産、難聴、知的障害につながる先天梅毒の報告数も増加しています。京都市では、HIV・性感染症（梅毒・淋菌・クラミジア）検査を無料・匿名（予約制）で実施しています。感染の機会や不安がある場合には、これらの検査を利用するか泌尿器科・婦人科・皮膚科等の医療機関を受診しましょう。

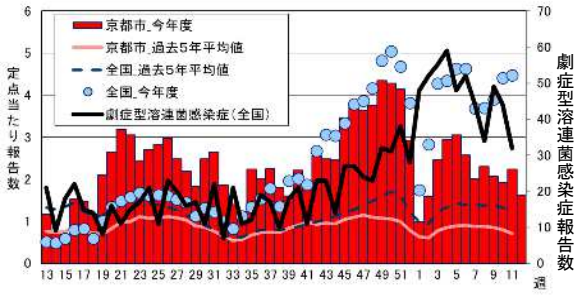
2023年度は、通常と異なる発生動向が見られる感染症や、コロナ以前の動向に戻るものも見られるなど、今後とも感染症発生動向に注意が必要です。



（図1）新型コロナウイルス感染症推移



（図2）インフルエンザの定点当たり報告数推移



（図3）A群溶血性レンサ球菌咽頭炎定点当たり報告数推移及び劇症型溶血性レンサ球菌感染症（全国）報告数推移（2023年

年	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024（~12w）
全国（人）	3,133	11,015	147	447	439	283	229	462	35	165	186	279	744	10	6	6	28	21
京都市（人）	15	106	4	2	0	1	3	4	0	2	1	1	2	0	0	0	0	1

定点把握（2007年12月31日まで） ⇒全数把握（2008年1月1日から）

（表） 国内の麻しん感染者数の推移(2024年12週まで)